

# 室生犀星「浮気な文明」の周辺

——犀星のおせっかいと朔太郎の離婚——

高瀬真理子

日本語コミュニケーション学教授

犀星が、朔太郎から「生活上の決算」の決意を書簡で知らされたのは、昭和四年六月のことであろうと推定されている。当時、朔太郎は前橋に帰郷しており、犀星は、馬込に住んでいる。朔太郎の留守宅も馬込にあり、「自宅の方をたまにのぞいてくれませんか。留居〔守〕宅の様子をそれとなく探つて僕に通信してくればありがたい」と書き送っている。犀星は、朔太郎と稲子夫人との破鏡に、<sup>注1</sup>大きな影響力を持ったと同時に、兄弟か何かのようにその余波を受けてもいる。また、犀星は、朔太郎の決着のつけ方には、終生ある感慨を抱いて語り続けた。

本稿では、親友朔太郎の家庭の危機を犀星としてどのように受け止めて加勢したのか、また、朔太郎は、犀星の忠告と妻の素行に挟まれながらどのように決断していったのか、犀星作品「浮気な文明」を軸に論じてみたい。

犀星と朔太郎は終生の親友でありながら、その人物理解には、と

かくお互いに不満がくすぶりがちである。特に朔太郎は、犀星が自分を単なるお坊ちゃんだと見ていて、自分の苦悩を理解しようとしていないとたびたび表明している。<sup>注2</sup>にもかかわらず、朔太郎の一大転機において、犀星の果たした役割は大きい。また、作品発表も朔太郎の離婚と同時進行であつて、親友の手になる作品発表だけに反響も大きく、朔太郎にも衝撃があつたのではないかと思われる。それでも、犀星と朔太郎の友情は破綻しなかつたのであるから、そこには、犀星なりに友人としての「浮気な文明」発表の意図があつたと見るべきであろう。

朔太郎が、上田稲子と結婚したのは大正八年五月一日である。稲子の父伊太郎は、旧加賀藩主前田家の図書係を務めたとされ、厳格な人柄であつたと伝えられる。<sup>注3</sup>

犀星一家とは、当初から親しく行き来があつたが、大正十四年四

月には、朔太郎一家も田端に越してきて、十一月下旬に稲子の健康上の理由で鎌倉に転居するまで、芥川も含めて頻繁に行き来した。朔太郎は、大正十五年十一月下旬から馬込に住み始めるが、昭和三年に十一月に犀星一家が馬込に越してきて、行き来が頻繁になる。犀星の居宅は、稲子夫人が探してきたものである。

昭和三年当時、馬込は、尾崎士郎、宇野千代夫妻を始め、川端康成などが暮らしていて、大変に賑やかであった。また、関東大震災後の復興とともにアメリカ文化が流入し、ジャズやダンスが盛んであった。朔太郎はダンスを習い始め、家庭内にもダンスを持ち込んでいる。「尾崎士郎君や萩原恭次郎君などから、可成手きびしい非難と忠告さへいただいた」と朔太郎自身が述べている。朔太郎は独自の「ダンス哲学」<sup>注5</sup>を以て臨んでいたようだが、周囲には理解されなかつたようである。当然、稲子夫人もその影響下に巻き込まれていた。犀星は、大正十一年頃から朔太郎が興味を示して身につけていた手品についても終生理解することがなかつた<sup>注6</sup>ようだが、ダンスについても興味を示した形跡はない。犀星は馬込に越してきた早々の昭和三年十一月二十六日、自宅で朔太郎とともに夕食をとったあとで萩原家に寄り、ダンスをしている。朔太郎の年譜に、犀星が「初めてのダンスをビールを飲み元気をつけて稲子夫人から習う」とある。物堅い犀星にとつて、有夫の女性の手を取って踊るといふことが、どれほどの衝撃であったか想像に難くない。

この後に続く朔太郎の離婚騒動に、犀星は、親友として深く関与

することになる。芥川に対してそうであったように、朔太郎に対しても「おせっかい」の気のある犀星は、それが故に好まぬ噂の渦中に巻き込まれたり、稲子夫人の手記に書かれたりしている。<sup>注9</sup>

「浮気な文明」は、昭和四年八月号『改造』<sup>注11</sup>に発表された作品である。脱稿日は七月一日である。<sup>注12</sup>一読する限りでは、当時の風俗をとらえ、感覚的な表現の冴えた、しゃれた小品とみなされるであろう。<sup>注13</sup>この作品は、「彼」が朔太郎、「彼女」が稲子夫人、「カツ」が夫人の交際相手の一人とされている鈴木という若い男、「ワニ」が犀星をモデルとして構成されている。

一章にあたる「チヤズの中」では、「何から何まで明るく人をそらすことのできない性分」の男が「決闘したくなる」のを尻目に、「チヤズ」の音楽が流れ、別の男と踊りながら、踊りの相方に「笑ひかけて」「いく」「彼女」は、「決闘したくなる」ことを「古いんじやない？」と受け流している。その「彼女」は、「わたしは子供のやうな性分よ、人によくしてあげたくて、人にいやがられるのが嫌ひで、好きなら好きといふことに遠慮なぞ出来なくて、厭になつたらそれきりもう何も彼も厭になるわ。」<sup>注10</sup>と言ひ、それは、男だけじゃなくて女も同じなのだと言ひ、また、「今時に決闘なんかしたら、あなたの命が幾つあつたつて足りないわ」とか「わたしは浮気よ、それで間違ひがなかつたらいいぢやないの。」とも言っている。男は、そういう女に「高びしやな超越した、彼なぞを問題にしてゐな

い」ものを感じて不愉快になっている。

「或晩おそく」、二人は食事をするためにカフェに入ったが、「その女のなかの二三人は彼を見て親密そうに笑ひかけ、その中の一人は素早い手つきで彼のタバコに火を點けるのであった」。この日、面白くなかったのは、「彼女」の方だった。カフェを出た夜道で「娼婦と変わらない女ぢやありませんか。」と攻撃する。「彼」の反撃は「ダンスに来る女だつて何もカフェの女と變つたところがないぢやないか」であった。

二章にあたる「何故晩食は遅くなるのか」では、「彼」の仲間「カツ」という若い「美青年に近」い男と「彼女」の関係が問題になる。カツには、茶を出しておきながら、「彼」には出さず、化粧はするが、夕食の催促をしているのにがしろに扱われた「彼」は、とうとう女の頬を数回打つ。「彼女」はカツに「医者を呼んでくれ」と言い、夕食どころではなくなったので、カフェに向けて家を出ている。「彼」は外でさらに仲間の「ワニ」に行き会う。ワニは、「お前のやうな好人物が殴つたと言ふのか。」と顛末を聞いて尋ね、カツの出入りを止めるよう忠告するが、「おれが来るなど言つても、女が自分で勝手に呼ぶのだ。おれは面倒臭くなつて打抛うちぢやつて置いてある。」と答えている。さらに尽き込んでいくワニに、「彼」は「おれはあいつらが、何をしようとおれだけが不愉快で済むことなら文句はないのだ。」と答え、ワニは「普通の人間には持てない気持」と「低迷主義」のあることを感じ当てている。

三章にあたる「古くさい友情」では、その後の「彼女」と、カツと「彼」の問題とそこに絡むワニの友情が問題にされている。朝食を食べそびれている「彼」に、ワニは駄菓子屋からバター付きの食パンとサイダーを買って渡している。「彼」は「お前はさういふ下世話が好きな男なんだよ。」と言うが、気にする様子もなく世話を焼いている。「彼はワニが自分の家があるのに態々拙い食パンを一緒に食べてゐることが、可笑しくもあり感傷的にも見え、いかにもワニらしいおせっかいだ」と感じている。その関係は、「彼女」をして「ワニさんはわたしのことを嫉いてゐるのよ」と言わしめるほどである。それでも「彼」は「何も話はなかつたが、只茫然と二人で居るだけの、意味のない、しかも離れられない変な友情を感じ」出している。また、一方で、「彼奴は自分の考へ通りを友人にも生活させようとすることがあるよ、おれ達の生活も彼奴の意見通りのものになれば、彼奴は何も言はないのだ。」とも感じて「彼女」に話したことがある。この二人は、「彼」が「おれは当分女には物を言はないつもりだ。そしたら少しは懲りるだらう。」と言うのに対し、ワニは「君が無言でせめて二日も暮らせたら大出来の方さ。」と見破られている。

四章にあたる「フリユトを吹く男 その一」では、彼女が打たれたことで、カツをより側に引きつけ、「彼に諷刺がましい高声で話し、笑ひ声を立て々ゐたので、脳貧血も嘘だとしか」「彼」には思われなかった。カツは、女のそばでフルートを吹いて聞かせている

のだが、「彼」は、女を「憫れむ気持は音楽的なデリケートな感情から」起こり、「軽蔑するものはカツの人物の軽薄さを認め乍ら交際している女自身の粗悪な感情から」来るものであることに思い至る。「彼」は「女は女で勝手な友人的な社交を持つことはよいが、同時に経済的にも独立した財産と収入を持たない限り、その生活発展を為し得るものではない」と考えている。それに感化された女もタイプストになるようなことを言ってはみるのだが、実行は伴わない。その割に女は「カツやカツの周囲の男などと交際することは平気」で「わたしだって自分の生活もあり友人もいるわ、男にだけ自由があるなんて其<sup>そんな</sup>時代ぢやないのよ」と言い、その義務を忘れて権利だけを主張する姿をワ二は「あゝいふのを雑誌病のやうな走り種で、座談会の記事やモダンの穿<sup>は</sup>きちがひのやうな奴」とみなし、「あいつらが我々の生活から分離して独特な経営的な生活をはじめた時には、賈<sup>ひ</sup>物が無くなり本物になる時なんだ。今のところは単に浮気と軽薄さを時代的に利用しただけに過ぎない。」と評している。「彼」はそういう意見に首肯するものを認めると同時に「彼女らが独立的な気持を建てようとしてることに」「否むことが出来な」いものを感じている。また、カツに対する気持を聞くと「彼女」は「たゞ好きなだけよ、その外の何でもないわ。好きなどいふことが意味の凡てに当るわ。」と答えている。ただ「好きだから仕方ないわ」という台詞は、「殆<sup>た</sup>真理に近い言葉であり、その奥もあとも前も無いもの」である。彼女に「理屈なしに別れたつていい

わ。」と言われてみれば、「彼」も「気持が動かぬ」くなり、「不愉快なばかり」になって、「彼女」の言うような「決闘なさろうと考へたことがある」という「気持に尖るもの」をすでに感じなくなっていた。愛想を尽かしたことになるのだろうが、そういう気持を「彼」は「あれはおれのまだ健全だった時のお前へのやきもちさ、いまはあんなに健全な気持なんて微塵もない」と答えている。いざ別れるという話が具体化してくると「彼女」は「でもわたしは急には厭よ、別れるとしても別れることが最<sup>はつきり</sup>つと明瞭と頭に応へてくるまではだめよ」と言っている。経済的に自立していかないところから来る恐れが言わせる言葉かもしれないが、気持ちが離れていることを確認してしまった今は、「彼」の方が「おれをコレ以上いぢめるのは止してくれ」という言葉になる。それに対して「彼女」は、「わたしは自分の方を考へてかゝらなきや」と言い、「わたしはあなたのお望みとほりに別れるんですもの」とあたかも「彼」の一方的な希望を受け入れたやうな言い方になっている。「彼女」は、男女の平等性とか同一の権利だとか、時代の「文明的な」影響を受けてそのように生きながら、家庭婦人として生きる場合には、その経済的に夫に依存することに起因する義務を負うか、もしくは経済的に自立を果たして完全独立するかのどちらかと引き替えにしなければならぬことに意識が思い至らなかつた、もしくは、うまく免れていたつもりが、それでは済まなくなつたツケをつきつけられた格好になっている。

五章にあたる「フリユトを吹く男 その二」では、カツのフルートを聞きながら、「彼」は「この女に別れてもよいものを益々強く感じ出し」ている。その女への気持ちの種類は、「不愉快」から「憐憫」に変わっていることを確認している。

六章にあたる「肉体の檻」は、ワニが、カツと女が歩いているところへ突然出くわす場面から始まる。ワニは「試写の催し」を終えての帰りであった。女の方から挨拶された上に「あてなしの散歩」と言われ、「鋭い目付で時計を出して見て、女の目の前に突き出して見せ」ている。夜の十時を回っているので、何時だと思っただけでなく、女は、「声に異常な自警的なもの」を見せながら、それでもワニに自分も試写に誘ってくれるように頼んでいる。ワニは、にべもない断り方をして家へ帰るように促し、決まり悪そうなお返りにも念を押して別れている。

ワニは、その顛末を「彼」に話すが、「彼」は「鬱し尽した顔付」になって「別れることにした」ことをワニに告げる。ワニは「自分が自分で別れるといふ間はまだまだ別れはしない、本統に別れるとなれば非常に冷淡な速度でやつてくるよ」と事を看破して言葉を返している。「彼」の方はワニに「何も話すまいと思ひ乍らつひ話してしまふ自分を、不愉快な意気地のない気がし」ているが、さらに、女に「憐憫の情を感じるやうになつた」とまで話してしまう。ワニは「お前にその音楽家的気質のある間は女には抵抗できなくなるの

だ」と言い、二人の間の友情が、ある微妙な感情に曝される。「彼」は「ワニと諍つてゐるうちに不図ワニと女とを比較し、ワニと絶交してもよい気持ちになり、さうなれば女とも別れられないやうで不安」な一方、「自分と女との微妙な欠点を知つてゐる友達を断ち切ることも必要な気がした。此の男を自分から切り離して遣らう、彼はかう思ふと痛快でもあり明るくもなり、煩さい退屈な友情から隔れる心安さを感じ」て、その意を含んだ言葉をワニにぶつけている。ワニは「神経の筋ばかりになつた顔付を一層、引き吊らせて彼の顔を顧り見」て、「おれがお前達の生活の邪魔になるとでも言ふのか」と言い、「それ程お前はあの女にやはり惚れてゐるのだよ。何といふ度しがたい好人物！」と言いながら、「背後うしろ向きになつて歩き出した」が、「ふと立ち止まつて」哄笑しながら「あの女ともう一度結婚を仕直したらどうだ」と言い出す。「彼」は、たまりかねて「おセツカイめ、いい加減にしろ」という言葉を叩きつけ、その言葉とともに作品は終わっている。

「浮気な文明」では、結局、夫婦の危機を描きながら、友情の危機をも描いている。作中でも、彼女が「ワニさんはわたしのことを嫉いてゐるのよ」と述べる場面があるが、彼は「何も話はなかつたが、只茫然と二人で居るだけの、意味のない、しかも離れられない変な友情を感じ」ているように書き、「彼」の天秤の片方に夫婦関係があり、もう一方にワニとの友情が「彼」の内界でバランスをと

っているような書きぶりである。これは、朔太郎一家をモデルにしている作品である以上、とりもなおさず、犀星から見た朔太郎の葛藤の描写になる。小説はあくまでも虚構であるとは言え、稲子夫人も手記で「MS氏は親友への友情からばかりでなく、不当な私への反感や嫉妬からも萩原を私の手から奪ひたかつたのであらうから。」と述べていることには、注意を払わなくてはならないだろう。

朔太郎からの書簡を追うと、「浮気な文明」脱稿後にあたる七月九日付には、「いよいよ僕は決心した。家庭を破談してしまふのである。」

そのことの内容は、何れ逢つてから詳しく話すが、さしあたり用件を御たのみする。」と書いて郵便物の整理と写真機を引き取つて朔太郎自身へ手渡してくれるように頼んでいる。また、「家庭のことは、尚暫らく人に言はないでおいて下さい。事件は目下進行中であるから、結果が決する迄内所にした。万一結果が複雑して予期の通りに行かない時には、僕として大に外間が悪い故、この際しばらくば絶対に秘密のこと。君にだけこつそりと暗示するのだ。」と述べた上に追伸のところへ「馬込の一派は皆夕チの悪いゴシツプ屋だから、特別にご用心のこと」と念の入った注意を促している。犀星は、これに先立つて小説を書き上げていたことになるわけで、親友にかかる迷惑を顧みず、あるいはそれをも織り込み済みでの執筆と思われるのであるから、犀星の執筆の意図も問題としなければならぬ。

次の八月上旬の書簡は、「浮気な文明」を読んだ上でのきわめて

長文の手紙となっている。書き出しは、犀星の友情に感謝しながら、朔太郎独特の決意表明の形になっていて、犀星作品の登場に驚いた気配は見受けられない。どちらかというところを許して妻の行動の分析を冷静に試みた論文的な趣がある。

君が友情によつて僕を鼓舞し、僕について考へてくれる厚情はよく解る。君の言ふ如く、僕に於ても善き未来が開かれて来るかも知れぬ。僕はあまり長い間、過去に宿命的の憂鬱を忍んで来た。その生活上の暗影は、僕の思想をしてニヒリツクな宿命論者にさへ傾向させたほどであつた。しかし君の言ふ如く、既に失はれた過去のものは、未来に取り返さねばならぬ。(それが僕等の人生に対する復讐思想だ。)この近い三年来、僕は忍従すべきものを忍従し尽した。僕は宿命論者から跳躍して、アナキズムの復讐鬼にさへ傾向して来た。明白に僕は、僕の個人主義から出発して、人生に復讐することを考へてゐる。そしてこの点のみ、僕の「切り札」が握られてゐたのだつた。君も推察するであろう如く、僕の言語に於ける「意志」といふ字は、実にこの切り札を意味するのだ。そして今、さしあたり僕の呪はれた家庭に対し、この切り札を使用したのだ。——僕は意志によつてのみ生きる。これから後も、ずっと尚さうであらう。

また、「君が小説の中に於て、僕があれに一種のいぢらしさを感じ、

その感情だけで縁を持してゐたと見てゐるのは、確かに心理のポイントをうがつてゐた。他の事はとにかく、それだけは正直の事実であり、君の観察の明智を語る。」という批評も冷静に行われている。さらに作品内部と照合させて以下のように書いている。

だから君の小説にも有る通り、あれはいつも平気で言つてる。

「私はあの青年が好きなのよ」

「ただ好きだから好きなのよ。それで善いぢやありませんか。」

かういふ会話の意味は、決して一般の人には解るまい。彼女にとつては、それが全く単純の意味であり、そして同時に絶対の意味なのだ。

かうした女の単純性とイグノランスは、殆んど超常識であつて白痴にさへ類してゐる。所で君はさうした人間を憎めるか。親がその白痴の子に対して、却つて二重の憐憫を感じるやうに、僕としても常にまた同様だつた。

「ただ好きだから好きなの、それだけ。」と言ひながら、自分の行動をする女——罪たることを知らない女——を、如何にしても僕は憎悪することが出来なかつた。反対にいつも、不思議な憐憫の情に駆<sup>マユ</sup>かれ、奇妙ないぢらしさの念が感じられてた。

朔太郎は、「浮気な文明」に見られる描写や心理の推移を認めている。ただ、犀星の見解との間に差異を認めていないわけではない。

朔太郎は手紙の結論部分で次のように書いている。

僕は悪人に対してまで、人道的憐憫を感じる必要がないのである。君は聡明にもこの真理を、僕と全く質のちがつた他の推理から論断し、僕に対して暗示してくれるところがあつた。君は彼等を始から大悪人だと断定して居た。それは僕にとつてやや不理解に思はれたが、結局して僕の道徳哲学も、君の真理を認めざるを得ないのである。

朔太郎は、夫人が「女性の自立」や「男女平等」の真に意味するところをはき違えて、大切な夫婦を構成する根本の情や義理合いをあまりにもイノセントにあつさり脱ぎ捨ててしまつたのだと分析しており、その常識をも越えた単純さに「奇妙ないぢらしさ」を感じていると言える。

続いて八月六日付、<sup>注17</sup>軽井沢にいる犀星に向けたものだが、ここで初めて小説発表についての苦情が出される。しかし、トーンは低い。

君の「改造」の小説から、馬込町では大評判で、毎日色々な男が来て実否を聞きに来たさうだ。あの小説の文学的価値は別問題だが、ああいふ私生活上のことを友誼的寛容の「打ち明け」以上に、活字で公開されては甚だ困る。馬込村には文学的ゴシップ屋が多いので常に煩鎖な警戒をしてゐたが、僕の信頼する君までが、小説の種に人の家庭内事を持ち出すとは意外であつた。明白に言ふと、僕として不快であつた。これが君でなかつたら、もつ

と腹が立つのだが、君では憤れもしない代り、少しばかり苦い味であつた。

後は、「浮気な文明」の作品に即して次のように書いている。

君の小説ではカツ（鈴木）がやつつけられてゐるが、今から思へば鈴木などは罪がなく、最も純粹の方であつた。近頃の青年たちの厚顔さと無良心とは、殆んど一般的东西であつて、どれも皆同じタイプだ。鈴木などは中で善良の方であつて、僕は却つて憐憫に似たものさへ感じてゐるのだ。君の小説でも、尾崎士郎君の小説でも、鈴木が一人悪いモデルされてるので、僕としては妙に憐憫の情を彼に感じる。僕はカツに対する憎悪の念を少しも持たない。ただ過去に於て、少々うるさかつただけである。

きわめて冷静な態度と言うべきであらうか。多少の苦情を述べた後は、このモデル小説を受け入れた書きようである。また、尾崎士郎が同じようなモデル小説を発表したことも何え、犀星がこの時期に作品を出したことが、それほど奇異なことではないということにもなるだろう。朔太郎は犀星に「少しばかり苦い味」と言うにとどまらないうて、確固たる友情は揺らいでいない。おそらく、朔太郎は、犀星の制作意図にこめられた友情を読み取っているからこそ、苦情のトーンが低いのだと考えられる。また、作品に描かれている世界よりも実際の方が朔太郎夫人の罪が重いということも明言している。

厭やな奴等はたくさん居る。だが憎悪すべき奴は一人も居ない。男の方から仕かけるのでなく、女の方から引き込むのだから。そこで僕の結論としては、青年の方を罰するのではなく、女を離縁する外に途がなかつたのだ。

朔太郎の言う「憐憫の情」の解説は、あたかも書簡のやりとりでなされている感がある。その後は、子供を引き取つて実家に帰つた後の朔太郎の心情である。

子供二人を連子にして、親たちの許に食客してゐる。この現状がどんな悲惨なものであるかは、君にも御推察になれると思ふ。母と別れて事情を知らない子供たちは、毎日僕にすがつて泣き立てるし、親たちは親たちは、やつかい者を背負ひ込んだ迷惑を僕にあてこする。陰鬱！ 陰鬱！ 僕は折角、自由を求めやうとして、逆に却つて二重の重荷を買ひ込んだやうなものである。僕の取つておきの「切り札」は、過つて苦汁のマイナスを背負ひ込んだやつだ。だがどうにも仕方がない。

また、今日のこの状況を想定して、そうならないように離婚を言い出すのが引き延ばしたことについて、「ただそのことの恐ろしさと、子供への忍びがたい感情とで、今日迄最後の切り札を出さずに居た。（それによつて君たちから不決断を非難され、馬込のゴシップ屋から侮辱されて来た。）」と苦悩してきた胸中を開陳している。同じ手



紙の文面でも、分析を行っているとと思われる部分と心境を語っているところでは、ずいぶんと文面のトーンが異なっていることが分かる。

さらに八月十日、朔太郎は犀星宛に書簡を出している<sup>注18</sup>。整理された書簡番号があまり飛ばないところから、おそらくこの時期の朔太郎が書簡を出した相手の中で、最も頻繁で且つ本音を吐露した相手が犀星であったと考えられる。書き出しは次のようになっていた。

君が手紙によつて、僕に友情の或るものを示してくれる意味はよく解る。しかし何といつても、僕は今慰められない情態にある。僕はその事件から、少しも人情的なセンチメンタルは感じない。しかし或る憤怒に似て物悲しさを感じてゐる。(君にはその悲しさが解るだろう。)

朔太郎は、「或る憤怒に似て物悲しさ」を犀星も理解できると信じている。事件に対する見方は違つても、これまでの朔太郎書簡で見ると、「浮気な文明」や犀星の返信において、基本は朔太郎に寄り添つた理解がなされていることが分かる。朔太郎の気持ちは犀星に向けては開いており、三好達治の事件に対する反応などを記している。また、三好からの伝聞として「馬込辺の風評(宇野千代等)では、君がわきから、色々なおせつかいをするために、本来別なくても好い夫婦が、別れるやうになつたとのことで、君が大部悪漢のやうに流説されてるさうである。さういふ見方もあるだろうが、僕と

しては苦笑を禁ずることができない。僕は自分を信ずることの厚い人間だから、そんなことで他人の意見などを聞きはしない。君がワキに居たつて居なくつたつて自分の意志するだけのことは決行したろう。」という情報を入れている。朔太郎の姿勢として、犀星がいかにおせつかいをしようと決断の意志は自分のものであることを明言している。犀星は宇野千代に対して、大いに怒つたことだろう。後年、宇野千代は、その頃のことを次のように回想している<sup>注19</sup>。

この私の真似をして、萩原朔太郎の細君であるいね子さんが、髪を断りました。このオカツバ頭にすると、年齢よりもずつと若く、可愛いく見える利点がありましたので、私もいね子さんも、同じような気持でそうしたのだと思うのですが、困つたことに、いね子さんは若い、少年のような男の子と恋をして、一緒に家を出て了つたのでした。

そのとき、萩原の親友である室生犀星がカンカンになつて、「これはきつと宇野千代が唆かしたに違いない。断髪にさせたりして、もつての外だ。」と言つて怒つたと言ふのを後になつて聞きましたが、決して私がすすめて髪を断らせたのでもないし、恋をさせたのでもないのです。この室生の誤解による忿懣は、その死の半年くらい前までも続きました。

八月の朔太郎夫妻の離婚、十月の川端夫妻の転居、千代自身も前年からの梶井基次郎との関係が取りざたされ、昭和三年一月の「梶

井・尾崎絶交事件<sup>注20</sup>」に端を発して尾崎士郎が家を出、別居生活が続いていた。特に関東大震災後、東京の復興の中で流入してきたジャズに象徴されるようなアメリカ文化に始まり、ダンスや断髪の流行など華やかでモダンな文化の花開く中で、朔太郎夫妻もその文化の犠牲になった面を持つことがうかがえる。

朔太郎の書簡では、他に「ただ強めて言へば、君の世話やき性分が、僕にとつて少々うるさく感じられてゐただけだ。」と書かれている。これも犀星があらかじめ「浮気な文明」に書いている通りであることが分かる。つまり、犀星は、自分がおせっかいであることを十二分に承知しながら、朔太郎への友情故に今回の役割を演じたことになる。犀星は、前便の朔太郎の書簡から氣遣つて、子供たちに贈り物をしているが、犀星夫人とみ子へ朔太郎が特別に礼をことづけている文が追伸にある。

昭和五年四月号に、広津和郎が当時の馬込文士村のスキヤンダルに取材した「昭和初期のインテリ作家<sup>注21</sup>」を書いている。朔太郎は、犀星に宛てた昭和五年三月の書簡<sup>注22</sup>で、「広津和郎のは少々アクドク、あんまり好い気持ちに読まれなかつた。」と述べ、四月の書簡<sup>注23</sup>では父親の病状報告の後に「改造所載、広津君の小説は全くヒドイ。」と書き出し、「広津君は典型的の世俗人で、小説家の中の最も常識的な範疇に属する人で、おそらく僕とは正反対の相容れない気質なのだ。単に理解がないばかりでなく、一種の反感をもつてにらみ合つて居たのである。」と書き連ねていく。返す刀で犀星に向かつて

は、「君もよく僕をモデルにして悪態や諷刺画を書くけれども、君の根本に無意識の友情がひそんでゐるから、読んで表面的に腹は立つても、心の底ではどこか人の好い友情の微笑を感じさせる。だから君の場合は決して不愉快の印象を残さない。(君なら何を書いたつて構はないよ。少しも遠慮することはない。)」と述べている。これほどの信頼で結ばれている友情であればこそ、犀星は、他の文士達によるモデル小説が著されることも多少予測して、朔太郎一家がこのスキヤンダルから被る打撃をできるだけ小さくしようと試みたのではなからうか。<sup>注24</sup>

「浮気な文明」に見られる「彼」を中心とした「ワニ」との友情と「彼女」との夫婦愛が天稔になつて描かれている問題については、たとえば、昭和三十一年十一月から昭和三十二年の八月まで「東京新聞」夕刊に連載を続けた『杏つ子』に顕著に見られる問題だと思われる。杏子と亮吉の夫婦関係と杏子と平四郎の親子関係が、やはり最終的なバランスを失つて杏子の離婚につながっている。詳細な分析は別稿に譲るが、この作品は、犀星一家をモデルにしているだけに、やはり、作品上の問題というだけでは済まされない。

犀星の人間関係における距離のとり方は、親疎の情によつてのみ構築された独特の姿勢があつたものではあるまいか。寄せ集め家族の中に育ち、他人の父と他人の母の下、他人の兄弟姉妹の中での成育体験は、「血のつながり」とその他を区別する術を喪失したままの

人間関係の構築となり、自ら家庭を得た後ですら、家庭内での距離間と友人関係での距離間に確たる区別がつけられなかったのではあるまいか。『杏つ子』における娘夫婦に食い込んでいく犀星の眼については、すでに指摘があるが、親友夫婦の家庭へも、同様の眼が食いつき、果てはそこからそれぞれの生活をつかみだして、食欲に作品化していると考えることが出来る。それを作家の宿業と呼ぶのは容易いが、犀星独特の姿勢の一つとして把握しておきたい。

注

注1 伊藤信吉編『萩原朔太郎書簡集』昭和四十九年一月 人文書院 書簡三一七

注2 拙著「芸術家の友情と孤独——芥川龍之介と犀星、そして朔太郎など——」『室生犀星研究——小説的世界の生成と展開——』平成十八年三月 翰林書房 304ページ

注3 萩原朔太郎年譜『萩原朔太郎全集』15巻 昭和六十二年 筑摩書房

注4 萩原朔太郎「ダンスの弁」『悪い仲間』昭和三年三月号

注5 前掲書「ダンスの弁」によれば、朔太郎のは、音楽好きとジャズに興奮を覚えることの延長上にあるもので、「思想的にも、芸術的にも、また人物としての気質からも、常にむしろアンチ・

モダンボーイを以て任ずるものだ。」と述べており、当時のダンスホールにいるモダンボーイが「皆チヤキチヤキのモダンボーイで、例のラツパズボンに香水をつけ、ラツキヨー頭をかてかたとさせた連中ばかり」であるのに、朔太郎自身は、「ボドレエル好みのネクタイをし、明治初年に流行した四つポタンの背広を着、泥だらけの兵隊靴をはき、頭髪を箒のやうに乱し、無精ヒゲを生やして馬のようにならざる」。「オールドボーイ」であると述べている。現状の日本のダンスは、「愚劣」であり、西洋の本来の姿から考えれば、「家庭生活をして常に若々しくし、人生の色気を保つために」もっと年配の夫婦者が行うべきものだと思えている。

注6 『我友』（昭和18年7月博文館）には、手品について茅原（朔太郎）は「君は神秘とか象徴とかいふものの分らん男だよ。君はつきりと見えるものしか信じない男だ。」と言ひ、「すくなくとも詩を解せざるやからだ。」と批判する。一方、春吉（犀星）は、「おれはそんな種子タネを持つてゐて人の眼を瞞着したり、それを悉く知つてゐながら敢てそれを行へる人間の低級さに堪へないんだ。鹿爪らしくそれをやる君の顔を見てゐると馬鹿のやうな気がする。」と応酬する場面がある。

注7 前掲書、萩原朔太郎年譜 421ページ

注8 前掲書「芸術家の友情と孤独——芥川龍之介と犀星、そして朔太郎など——」『室生犀星研究——小説的世界の生成と展開——』

301ページ

- 注9 前掲書『萩原朔太郎書簡集』書簡三二二に、三好君の伝聞として、宇野千代周辺の風評が紹介され、犀星の「いろいろなせつかい」が夫婦離婚の原因とされていることを述べている。
- 注10 上田以弥子「結婚敗残者の手記」『婦人公論』昭和四年十一月号
- 注11 同じ号には、谷崎潤一郎の「出」、懸賞文芸評論の一等として宮本顕治の「敗北の文学」が掲載されている。
- 注12 日記『室生犀星全集』別巻1 新潮社
- 注13 『室生犀星未刊行作品集』第三卷（昭和六十三年 三弥井書店）の「解説」で奥野健男は、「文体が新感覚派的で、風俗、小道具が新興芸術派的な思いついた実験である」と述べている。
- 注14 前掲書、上田以弥子「結婚敗残者の手記」
- 注15 前掲書『萩原朔太郎書簡集』書簡三一八、一枚目が紛失されている。
- 注16 前掲書『萩原朔太郎書簡集』書簡三二〇
- 注17 前掲書『萩原朔太郎書簡集』書簡三二一
- 注18 前掲書『萩原朔太郎書簡集』書簡三二二
- 注19 宇野千代「四十年間の緊張」『私の文学的回想記』『宇野千代全集』所収 第十二卷 昭和五十三年中央公論社刊 初出は、犀星の没後九年から十年後にあたる昭和四十六年から四十七年にかけて『東京新聞』夕刊に連載したものである。
- 注20 尾崎俵士「梶井基次郎と尾崎士郎——昭和文士・その友情と絶交」『文学界』平成八年十一月号
- 注21 広津和郎「昭和初期のインテリ作家」『改造』昭和五年四月号。作中の「白井恭之進」が朔太郎、「須永」が尾崎士郎、「福島」が梶井基次郎、稲子夫人の相手の若者は、「峰崎」と設定されていて、「北川」（広津）から見た当時の馬込文士村の雰囲気と人間関係が、須永と北川の友情を軸に描かれている。
- 注22 前掲書『萩原朔太郎書簡集』書簡三五七
- 注23 前掲書『萩原朔太郎書簡集』書簡三六〇
- 注24 二瓶浩明「『青い猿』論——室生犀星と芥川龍之介」『室生犀星研究』第29輯（平成四年十月）においても、犀星が芥川の評価を守ろうしたとの指摘がある。
- 注25 米山正信『文学作品に学ぶ心の秘密』「父娘で演出した破婚劇」誠信書房（昭和六十年）や中川成美「家族のセクシャリティ——『杏っ子』（特集 小説を読む、家族を考える——明治から平成まで——家族／反家族の肖像）『国文学解釈と教材の研究』学燈社 平成九年十月号（102ページから106ページ）等の指摘がある。